



豊橋市美術博物館友の会だより

-2013年-秋号 Vol.86

FU風伯HAKU

Autumn 2013

展覧会紹介



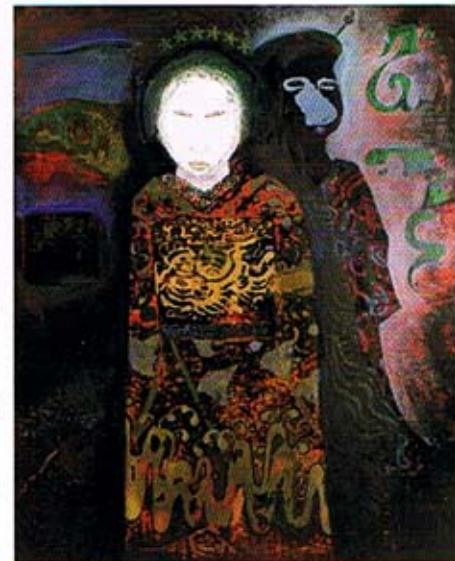
夏休み企画・収蔵品展 こわい絵

9月15日(日)まで 月曜日休館
豊橋市美術博物館 2階 第3~5展示室

豊橋市美術博物館には一見してぞっとするような「こわい絵」がたくさんあります。しかし、それらはおばけや妖怪、幽霊をモティーフに描いたものばかりではありません。なぜ、こわくみえるのか? こわい表現をまとう理由な何なのか? あえて「こわさ」から絵をよみとくことで、表層的なこわさから深層へと誘われます。おどろおどろしくもどこか懐かしい異世界の住人たちには、美麗など通常の概念を超えて画中からわれわれに何かを訴えかけています。そこにこめられた作者の意図や物語を知るべく、絵画の奥へ、異世界へと足を踏みいれてみてください。

日本画・油彩画などの近代絵画とともに、「東海道五十三対」「百種怪談妖怪雙六」などの近世資料も展示いたします。

まだまだ、夏の余韻が残る残暑きびしい折、ひとときの涼を求めて、美術博物館に足をお運びいただければ幸いです。



中村正義「うしろの人」1977年

東海道五十三対「二川」歌川広重
二川宿本陣資料館蔵

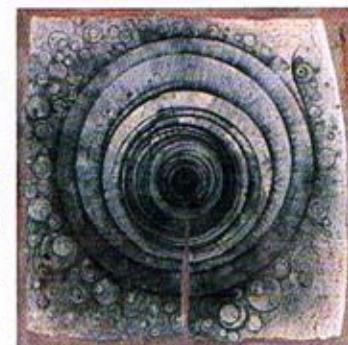
《展覧会の構成と見所》

I 江戸の「こわい絵」(第3展示室)

「東海道五十三対」のうち妖怪を描いた広重、国芳、豊国の大作浮世絵(ただし、掲載図版のように「こわい!」という心理を描いた主題も含む)のほか、歌川芳員「百種怪談妖怪雙六」、豊橋出身の文人・石川鴻斎の記した「夜窓鬼談」(小泉八雲も参考とした怪異集)を紹介。「百種怪談妖怪雙六」は引き伸ばして、実際に双六を体験できるコーナーを併設。サイコロを振るうち、妖怪通に…?

II 「こわい絵」めぐり(第4展示室)

モティーフそのものが「こわい!」という絵のほか、一見してこわくはなさそうでも、じっくりみているうちにこわくみえてくる絵、作品の本質を知ることでこわくなる絵など、さまざまなこわさを体験。「こわい絵」は饒舌です。ぜひ「こわい絵」の声に耳を傾けてみてください。出品作家は中村正義、星野眞吾、大島哲以、岡田徹、中村宏、斎藤真一、田島征三など。



星野眞吾「心象・円」1966年

III ほんとうに「こわい絵」(第5展示室)

現代社会で本当にこわいのは…? 戦争・災害・原子力の災禍であることは言うまでもありません。太平洋戦争に従軍し、悲惨な光景を眼のあたりにした山下菊二、水谷勇夫の描く作品が「こわい」のは、実体験にそくして恐怖そのものを描こうとしたからでしょう。50年以上前に描かれた山本鉄男の「原子病」もじつに「こわい」…しかし、もう目をそむけることはできません。

ばいこうあん 培広庵コレクション 雪月花～美人画の四季～

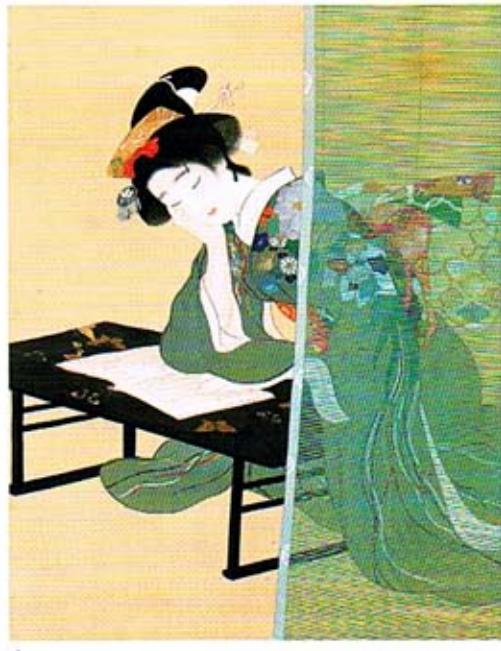
9月28日(土)～11月10日(日) 月曜日休館(ただし、10/14・11/4は開館し、10/15・11/5は休館)

美人画は、近世の風俗画や浮世絵に描かれた女性像を出発点として、明治以降は多くの画家がそれらを参考にしながら、自らの芸術を反映させた女性美を表現してきました。

優美な立ち居るまい、凛とした美しさ、はかない面影など、華やかな時代風俗とともに描かれる様々な女性美は、今なお人々を惹きつけてやまない普遍的な魅力があります。

本展は、一人のコレクターの眼を通して蒐集された珠玉の美人画コレクションから約80点を厳選し、それらを日本の美しい四季になぞらえてご紹介するものです。

美人画の巨匠、上村松園、鍋木清方、伊東深水、東京の池田輝方・蕉園夫妻、大阪の北野恒富、島成園、大正デカダンスを代表する京都の岡本神草、甲斐莊楠音のほか、北陸で活躍した紺谷光俊、広田百豊など今では人々の記憶から遠ざかってしまった画家の秀作が数多く含まれることも培広庵コレクションの特色であり大きな魅力です。四季折々の風雅とともに描かれた女性美の饗宴を存分におたのしみください。



1



2



3



4

5

◆記念講演会

「近代美人画の流れと培広庵コレクション」

9月29日(日) 午後2時～3時30分 講義室

青山訓子さん(岐阜県美術館学芸員)

◆イブニングコンサート・箏のしらべ

「四季の彩りを音色にのせて」(定員70名)

10月26日(土) 午後6時30分～7時30分 2F第4室

杉浦充さん(箏演奏家)

※要整理券(9/15日)より配布、1人2枚まで

◆ギャラリートーク

10/6(日)、10/17(木)、11/2(土) 各日午後2時～

(作品図版)

1 池田輝園「秋思」(部分) / 2 山川秀峰「阿倍野」/ 3 広田百豊「太夫」/

4 池田輝方・蕉園「春秋園」/ 5 上村松園「桜狩の図」

川瀬巴水展 愛知県美術館サテライト展示

10月5日(土)～11月17日(日) 豊橋市二川宿本陣資料館

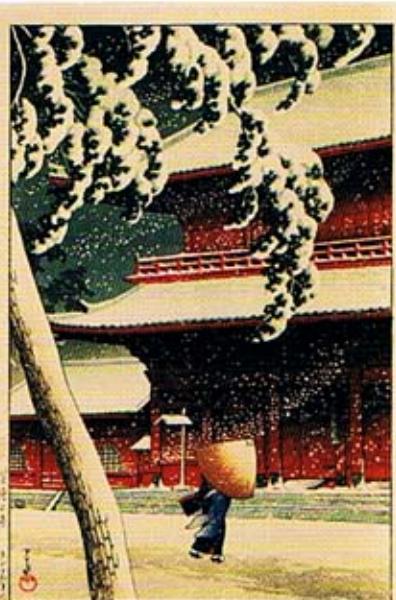
休館日 = 月曜日(ただし祝日の場合は翌平日休館)

開館時間 = 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

二川宿本陣資料館では、東海道を中心とする江戸時代の交通、二川宿に関する郷土の歴史・文化をテーマとする企画展を開催するほか、池田遙邨、関野準一郎、山下清、棟方志功など、東海道を描いた美術作家にもスポットをあててきました。

川瀬巴水(1883～1957)は、大正・昭和期に活躍した近代風景版画の第一人者で、日本画家・鏑木清方に入門し、35歳の大正7年(1918)より版画を始め、衰退した日本の浮世絵版画を復興すべく新しい浮世絵版画である新版画を確立した人物です。「昭和の広重」、「旅情詩人」などとも呼ばれ、日本各地を旅行し、旅先で写生した絵を原画とした版画作品を数多く発表し、東海道などをテーマとする作品を残していることでも知られています。

生誕130年の記念の年にあたる今回の展覧会は、愛知県美術館サテライト展示として、同館が所蔵する川瀬巴水作品全73点を一堂に展示し、近代日本の旅情あふれる風景を紹介します。初期の作品から、『芝増上寺(雪中)』、『馬込の月』などの代表作、絶筆『平泉金色堂』まで、各年代の作品が展示され、巴水の全容を知ることのできる展覧会といえます。



「芝増上寺(雪中)」

豊橋市文化財センターがオープンしました!

子ども未来館「ここにこ」に隣接していた旧母子保健センターを改装し、豊橋市の文化財を調査・研究し、守り伝える施設「豊橋市文化財センター」としてオープンしました。

市内の発掘調査出土品や、各種の文化財を紹介した「常設展示コーナー」、最新の文化財情報を提供する「企画展示コーナー」、各種講座や体験などを通じて、文化財を学び情報を発信する場となります。

所在地：豊橋市松葉町3丁目1番地 TEL 56-6060、FAX 52-2961

開館日：平日（祝祭日・年末年始を除く）

開館時間：午前9時～午後5時



豊橋駅から北西へ徒歩
10分、「ここにこ」の東隣
(旧母子保健センター)



豊橋市文化財センター

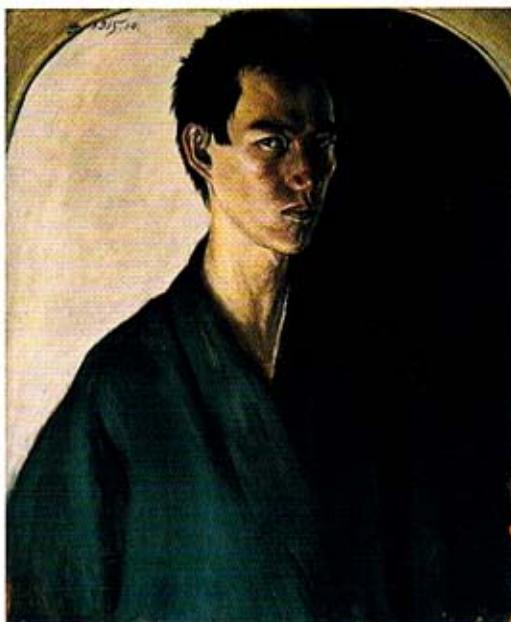
「木村莊八展」を観て

友の会副会長・「風伯」編集長
高須博久

すごい展覧会をみせてもらった。

岸田劉生はポスト印象派のセザンヌ、ゴッホに影響を受けたが、やがてデューラーの写実的作風に移っていき、1915年草土社を結成した。草土社の同人は劉生と一緒に生活する中で劉生の背中を見て勉強した。武者小路実篤をはじめとする白樺派の人々とも交流し、絵画のみならず、文学、音楽、演劇など芸術全般を語り合った。

木村莊八は草土社の中では兄貴分であった。東京生まれの東京育ち。都会のセンスを身につけている。《浅草寺の春》の赤の使い方、《牛肉店帳場》の自分を組み込んだ巧みな構図など、思わずうなってしまった。1937年、永井荷風の『墨東綺譚』が朝日新聞に連載され、木村莊八が挿絵を描いた。この挿絵に使われた多種多様な線の描き方は見事としか言いようがない。まさに『挿絵の描き方』を著した木村の面目躍如である。



「木村莊八展」に出品された高須光治《自画像》
1915年(和歌山県立近代美術館蔵)

同展では草土社同人作品も展示されていたが、中に劉生の《高須光治君之肖像》(特別出品: 豊橋市美術博物館蔵)と、光治が描いた自画像(↑図版: 和歌山県立近代美術館蔵)が展示されていた。光治は私の祖父の弟である。岸田劉生か梅原龍三郎のどちらかに師事しようか迷ったらしいが、明治45年の劉生の個展を見て感銘を受け、劉生の門をたたいた。

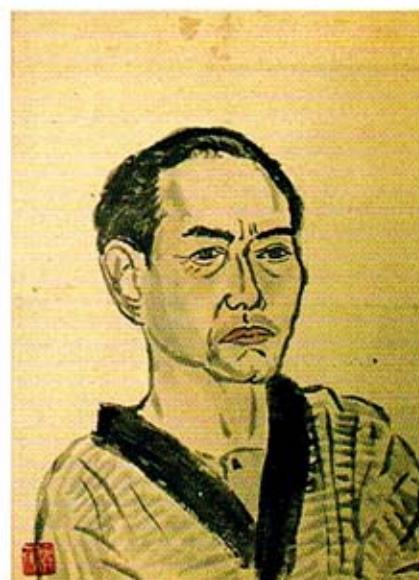


岸田劉生《高須光治君之肖像》の前での筆者
「木村莊八展」会場にて(新村猛氏撮影)

光治と白樺の人々との交流も始まった。私の手元には武者小路実篤が豊橋へ来て光治を描いたものがある。中川一政とのやりとりのハガキや麗子像で有名な岸田麗子からの手紙も一通だけ残っている。

私は小さい頃、光治と蒲郡の大塚の家で遊んだ。光治は朝起きると、ラジオで英会話や仏会話を聞いていた。ときには謡曲も練習していた。やたら勉強の好きな人だった。私は夕食後に動物の絵を描いてもらうのが楽しみだった。

光治は「絵は描くものをよく見るんだよ」と言っていた。私が中学生の頃、光治が家で花瓶に生けた花を描いていた。花瓶はまっすぐ立っているのに、絵では傾いている。つい私が「花瓶はまっすぐだよ。これじゃ倒れちゃうよ」言ったら、「わしにはこう見える」のひと言だった。



武者小路実篤筆
《高須光治像》

私は今回から「風伯」の編集長を拝命しました。微力ではありますが、会員の皆様に楽しんでいただける「風伯」にすべく努力してまいります。皆様からの投稿をお待ちしています。

春の研修旅行記

6月6日(木)・7日(金)の一泊二日で、軽井沢千住博美術館、セゾン現代美術館、小海町高原美術館をめぐる研修を行い、40名の参加がありました。参加者の感想を紹介します。

軽井沢千住博美術館をたずねて

内山重子(3031)

この度の研修旅行は、大きな有名美術館の見学ではなかったので参加を迷いましたが、宿泊先が万平ホテルならばと少々不純な(?)動機で参加しました。

しかし行ってみると大変興味深い事が多く、大満足の旅行でした。



千住博美術館にて

軽井沢千住博美術館は、千住氏のテーマである滝の作品色々と絵本を作った際の原画の展示で、直島の民家で観た同氏の作品を思い出しながら滝の面白さを堪能しました。

そして、建物は建築家の西沢立衛氏によるやわらかなフォルムのガラスで構成された斬新なもので、カラーリーフガーデンと一緒にになっていて、森の中を散策する様な気分で作品を鑑賞できるという都市の中心地では考えられない様な美術館でした。ガラスで構成された本館は、外からの光で明るく、床は自然の地形のままに起伏があり、この建物の建設に携わった人々にはさぞや大変な工事だったであろうと想像しました。

本館の他にも、映像で作品を見られる建物やショッピングやカフェの入った建物もあり、高原の美術鑑賞が様々に体験できました。

さて、いよいよお目当ての万平ホテル。さすがに歴史は古く、有名人が数多く宿泊するというクラシックホテル。雰囲気もサービスも洗練されていて、余分な物は一切なく、本当にゆったりと贅沢な一夜を過ごす事ができました。

美術館が美術作品

鈴木準之助(220)

友の会研修旅行二日目。軽井沢の朝は爽やかだ。ホテルの周りの林を散歩すると、同行の何組かの人と会

う。日本を代表するクラシックホテルのダイニングルームでゆっくり朝食。ホテルの玄関前で全員の記念写真を撮り、二日目の研修にイザ出発！

最初は「セゾン現代美術館」。当日の催事は「千紫万紅」。何かよくわからないタイトル。この展覧会の第一のコンセプトは、作品が普通よりかなり多め、ということ。そして第二のコンセプトは、いつの過去もかつては未来だった、ということだそうで、壁と床にかなり多めの作品が展示されている。同館の名品として知られる現代美術のクレー、フォンタナ、ボロック、アンディ・ウォーホル、マン・レイなどの作品の間に、というか、並んで古代の銅鏡、南北朝時代の鉄鉢、江戸時代の工芸品から横山大観、上村松園まで、西武鉄道と西武百貨店の当主が二代に亘って集めた美術品の好みの違いはよく分るが、両方並べてサア！と言われても…。私にはコンセプトの意味がくみとりにくかった。でも美術館は林に囲まれ、小川が流れ、散策路のあちこちに彫刻作品が置かれ、全体が美術作品のよう

で素晴らしい。

次は「小海町

高原美術館」。

昨年の「現代

美術展 in とよ

はし」で豊橋

とご縁のでき

た増田洋美さ

んがわざわざ



増田洋美さんのガラス作品

お出迎え。安藤忠雄さんの設計になる、コンクリート打抜きとガラスの建物で、陽光を浴びるスロープを地下に降りると展示室。そこに増田さんのガラス作品。他に陶芸と写真の三人の作品展。こぢんまりとした美術館にふさわしい作品展で好感が持てる。この美術館を俯瞰するための展望塔が別にあり登ってみる。美術館の屋上に増田さんの作品が飾ってあり、ここからしか見られない。面白い趣向。



展望塔から見た増田さんの作品

一日目の「千住博美術館」も含めていずれの美術館も、それ自体が美術作品でした。

こんにちは よろしく! ~新入職員紹介~



名 前：河合幸子（かわいゆきこ／事務長補佐）

趣 味：旅、スキー

好きなアーティスト等：伝統的なものが好きです。

仕事への抱負：明るい職場、みんなが気持ちよく働けるよう気をつけたいと思っています！

友の会へひと言：「文化芸術の保存・継承、創造、交流、発信」といった美術博物館の役割を果たすため、地域と協働して地域づくり・人づくりを進めている本館の活動にご理解いただき、ご協力して下さる皆様に深く感謝しています。ありがとうございます。



名 前：田中竜也（たなかたつや／学芸員〔美術〕）

趣 味：歩いたり、走ったり、登ったり。読んだり描いたりすることも好きです。

好きなアーティスト等：色がきれいで和む絵が好きです。

仕事への抱負：石川県出身で、毎日が発見の連続です。さまざまな価値観、豊かな感性を大切にして、初心を忘れず日々努力して参ります。

友の会へひと言：友の会の皆様と一緒に仕事をするのを楽しみしております。



名 前：星野好久（ほしのよしひさ／民俗資料担当嘱託員）

趣 味：釣り、そば打ち

好きなアーティスト等：ビートルズ

仕事への抱負：豊橋市民俗資料収蔵室が、多くの市民の心のふるさとのような存在になるようがんばります。

友の会へひと言：芸術鑑賞は人生のビタミン剤みたいなものだと思います。良い物にふれて人生を豊かにしていただければ幸いです。

◆お世話になりました

前事務長補佐・鈴木宏始さん（国保年金課へ異動）

大野俊治さん（主任学芸員／美術）、高橋利政さん（民俗資料担当嘱託員）のお二人は退職されました。

♪友の会コンサートを開催します♪

尺八と箏のゆうべ 「夢ひとつ - 美人画に寄せて -」

日 時／10月13日(日) 午後6時～7時

場 所／美術博物館玄関ホール

出演者／岩田恭彦さん(尺八)、樽本里美さん(箏)、戸田弘子さん(箏)

予定曲／夢ひとつ(岩田恭彦)、春の海(宮城道雄)、月のしるべ(江戸信吾) ほか8曲

※お申込み＝9月17日(火)より電話で受け付けます(TEL.51-2882)(定員80名、先着順)

正会員・学生会員・風伯会員は本人のみ、特別会員は2名、賛助会員は5名まで申し込みます。

収蔵品紹介

むかしばなしはけものすごろく
[百種怪談妖物雙六]

歌川 芳員●UTAGAWA, Yoshikazu

安政5年(1858) 木版多色刷 50.0×69.0
柴田家文書

江戸時代に百物語と呼ばれる怪談会が流行しました。明かりのない部屋に集まつた人々は車座になり、順番に怪談話を披露します。話を終えた人は、別室に用意した行灯の灯心を一本ずつ消して行きますが、その横には鏡が置いてあり、自分の顔を写して見なくてはなりません。最後の百話目が終わって、全ての火が消えると妖怪が姿をあらわすといわれました。

『諸国百物語』をはじめとする怪談文学や、妖怪たちをビジュアル化して紹介した鳥山石燕の『画図百鬼夜行』なども出版されています。浮世絵では、北斎や国芳が破れ家を跋扈する妖怪たちを描きました。また、北斎の「百物語」シリーズは、四谷怪談や皿屋敷の化け物自体にスポットを当てています。

本作は、タイトルに「百種怪談」とあるように、百物語の趣向を双六に仕立てたものです。下中央、子どもたちが百物語をしているところが振り出しています。この双六は、出た目の数だけ進むのではなく、「飛び回り双六」といって、出た目によって指定されたマスに飛びなが



ら上がりを目指します。24個のマスには、雪女・河童・海坊主・猫又・お岩・一目小僧・轆轤首・唐傘小僧・分福茶釜・蜻入道などおなじみの妖怪たちが次々と現れます。上がりは、老婆が十二单を着た化け猫になる歌舞伎の「岡崎の猫」。次にどんな妖怪が現れるかわからないスリルは「飛び回り双六」ならではの楽しみでしょう。

(豊橋市美術博物館主任学芸員 増山真一郎)
※夏休み企画・収蔵品展「こわい絵」にて9/15まで展示

編集後記

本号から編集委員が大幅に入れ替わりました。前任の皆さんには毎回、熱心な議論を重ね、インパクトのある誌面を構成してこられましたが、私はそんな風伯が大好きでした。

しかし、自分がその編集委員を頼まれると、「丸く収める」ことに汲々としてきた我が人生を顧みて、あの編集はとても真似できないと思い、再三お断りしました。ところが「丸く収める病」は「あまり断っては角が立つ」と、いつの間にか私に就任を受諾させてしまったのです。

さて、就任後初の編集会議。初顔合わせの編集委員は皆、個性豊かな人ばかり。あれよ、あれよという間にゲラができ、けっこう「こわい話」で角のある風伯になったと感じています。表紙の美人画からしてこわいでしょ？

丸く収めようとしなくとも、丸は究極のところ、無数の角の集まりですものね。

(望月志郎)

【表紙作品】

上村松園(明治8年～昭和24年)

《桜狩の図》(部分)

昭和10年 絹本着色 127cm×42cm 培広庵コレクション

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第86号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

編集長 高須博久(副会長)

編集部長 望月志郎

編集委員 鈴木冷子 神野志保子 河邊潤江 藤本逸子

清水貴裕

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成25年8月31日発行